

# 保育者の専門性確立の過程に関する研究

—造形表現教育を事例として—

浅井 拓久也・道源 綾香

## A Study on the Process of Establishment of Expertise in Early Childhood Education:

Through the Analysis of Case of Art Education Class

*ASAI Takuya, DOGEN Ayaka*

キーワード：専門的な知識・技能、学びの過程、  
ウィルコクソンの符号付き順位検定

### 1 研究背景と目的

本論文では、保育者を目指す学生が、養成校で保育の専門的な知識・技術を学ぶ過程に着目し、どのように学び（気づき、発見）を得ているかについて明らかにすることを目的とする。ここでは、保育課程科目の一つである造形表現の授業を取り上げ、教員が伝える専門的な知識や技術を学生がどのように理解し、習得しようとしているかを明らかにする。これによって、保育者の専門性の基礎を確立する授業や教授方法の改善の示唆を得ることにもつながる。

手先を動かすことや素材に触れること、数多くの形や色に出会うことは五感を刺激し、脳に働きかけるため保育や幼児教育においてとても重要である。槇は「造形的な表現は、自分の手を使って身体と心を育て、個の確立を助けるだけでなく、その過程や結果が自分と周囲の世界をつなぎ、かわりを深め、生きる力の礎をたしかなものにします」（2008：12）と乳幼児教育における絵を描くことや工作をすること（以下、造形表現）の意義について述べている。

また、日常生活で触れ合うものに意識をし、見方を変えることで楽しさを見つけることができ、豊かな感性を育むきっかけになる。たとえば、雲

の形や壁紙、木製の柱が動物や人の顔に見えることがあるように、自らの経験を基に何かを他の何かに見立てる活動は、創造力を身に付け発想に広がりをもたせよう。

『保育所保育指針』（厚生労働省 2008）の「第3章 保育内容」、『幼稚園教育要領』（文部科学省 2008）の「第2章 ねらい及び内容」には発達に必要な「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5領域が示されており、造形表現にかかわる「表現」には「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と提示されている。

ところが、授業中に保育者を目指す学生を見ると、さまざまな経験や創造力、発想力の不足、またそれによる感性の乏しさが目立ち、造形表現を学ぶ子どもたちの豊かな感性を育む機会が減ってしまうのではないかという懸念がある。

学生たちはひとつでも多くの経験や体験をして自らを深め、子どもたちの遊びを中心とした日々を充実させるための内容を考えることや子どもたちの作品を見る力を養うこと、自らが経験したことを子どもたちの目線になって考え直し、援助や指導ができることなど、造形表現を通して身に付けなければならないことがたくさんある。槇は「保育者は、乳幼児期に適した非言語コミュニケーションの手段を豊富にもち、表現したくなる手だてを状況に応じて提供できる専門性を身に付け

る必要があります、『造形』はその有効な手だてとなります」(2008:11)と述べている。

学生たちの美術嫌が多いからこそまず本人が造形表現の授業を楽しんで行き、少しでも前向きな意識をもって現場に立ってほしいと願うが、そればかりでは保育現場で求められる造形表現の本来の役割は果たせない。保育士や幼稚園教諭は命を預かり、成長を見守らなければならない仕事だからである。保育者が楽しいと思えなくても創造力や発想力を培うように子どもたちが楽しめる造形表現を提供しなければならず、子どもたちの発達状態を把握し危険事項に留意した上で、より多くの素材を集めてより良い環境を提供しなければならない。

そのために、学生たちには造形表現を楽しむという気持ちや好きになることより、自分自身が少しでも造形表現を身近に感じ、抵抗感を無くすことを大切にしてほしいと考えている。造形表現を行うときは子どもたちと一緒に普段の何気ない日常に目を向け、意識をして「見る」ことで楽しさを発見し、日々を少しでも面白くする方法が身につくとより良いだろう。

以上の研究背景について先行研究を概観すると、保育者養成校での授業試案や保育者を目指す学生の感性が乏しいことを指摘し改善策を提案する研究(武田 1999、村田 2010、佐善 2011、2012、小林 2016)は数多く行われてきたが、そのような教授方法や内容が学生にどのように伝わり(学ばれ)、学生がどのように習得をしようとしているかという、受け取る側である学生の学びの観点から検討されたものはなかった。授業を行い、内容が適切に学生に伝わっているかを検討することで、保育者養成校での学生の学びを効果的なものにすることが可能であり、保育者としての専門性を確立する土台となることから、学生がどのように学んでいるかを検討することが必要であると思われる。

そこで、本研究では保育者を目指す学生が、養成校で保育の専門的な知識・技術を学ぶ過程に着目し、どのように学び(気づき、発見)を得ているかについて明らかにすることを目的とする。執

筆者が授業方法として取り入れている保育者養成校で一般的に行われるカリキュラムから保育実践の場を想定し、作品鑑賞や日常生活を「見る」こととのかかわりで重視する造形教育の教授法を事例として、学生が保育の専門的な知識・技術を学ぶ過程を明らかにする。

## 2 造形表現の授業概要

執筆者の一人が平成 28 年度に担当しているのは 1 年生と 2 年生であり、授業概要は以下の通りである。

子どもの保育内容を理解し、造形遊びを豊かに展開するために必要な基本的知識と技術を習得する。また、身近な自然やものの色や形、感触やイメージ等に親しむ経験をする中で、様々な用具、素材や教材に触れ、保育環境の構成や表現活動に関する保育技術を習得する。ここでは先ず、平面素材である、水彩絵の具やクレヨンなどの描画材に着目し、版画表現から生まれる無作為の表出の美しさを知ると共に、表現の可能性の幅を知り、保育現場への活用法を学ぶ。(1 年生前期)

造形表現 I を基に、保育者として必要な造形表現に係る教材等の活用及び作成法を習得する。また、子どもの経験や様々な表現活動と造形活動とを結びつける遊びの展開や、イメージや感性を養う環境構成及び具体的展開のための保育技術を習得する。ここでは、立体での表現の素材に着目する。粘土、木、紙、生活素材など、保育現場で使われる主な素材を学ぶと共に、扱い方を知り、可能性を探る。そして、それらの保育現場への活用法を学ぶ。(1 年生後期)

教科書「こどもと造形表現 I」のほか、写真や図版を用いた絵画技法や造形表現のテキストを使用し、図画工作の演習能力をさらに深めていきます。また幼児造形教育の指導者として必要な基礎知識と理論を学び、保育現場で活かせるような、

指導計画を作成し、実践的な教育方法を身につけていきます。(2年生前期・後期)

1年生の授業は一週間に1コマ45分が2コマ続きで90分あり、内容はだまかに前期が平面的な作品制作、後期が立体的な作品制作に分かれている。

前期のカリキュラムの内容は初めの6回分でさまざまなモダンテクニックを行う。種類はフィンガーペンティング、ドリッピング、デカルコマニー、マーブリング、バチック、スクラッチ、スタンピング、フロッタージュ(屋外制作)、カラージュ、ローラーを使用して行う造形遊びである。その後、グループ制作としてこれらの技法を応用し、テーマに沿って壁面装飾を制作する。その他、画用紙を使用し学生同士向かい合って顔を作る紙版画や五感の中の「視覚」、「聴覚」、「触覚」を使って作品を作る課題、色彩やデザインについても触れる時間を作る。

立体的な作品を制作する後期は保育現場で主に使用される粘土、木、紙、生活の中で身近に使われる素材(廃品も含む)などを使用して制作する。課題の種類はいくつかあり、粘土では妖怪と花畑の制作、割りばしでは建物や遊具などの立体物の制作、自分が撮影した写真を使用し、空間を意識したカラージュも制作する。その他にも色々な種類の紙(画用紙、新聞紙、和紙)を使用する張り子のお面制作や1年間の集大成として、「保育発表会」の大道具、小道具、衣装の制作を行う。これは保育の現場で行うお遊戯会や発表会を想定し、各クラスの中で担当を決め、ひとつの催し物を作り上げる行事である。

2年生の授業は一週間に1コマ45分であり、内容は1年生の時に基礎的な色や形、モダンテクニックについて学んだことを踏まえて、保育や幼稚園教育をより意識して行えるよう工夫する。前期の初回授業から園で行われる可能性のある行事や四季の特徴を把握する時間を設け、造形遊びをしながら常に意識するよう課題の設定をする。現場で実践可能なものを選び、子どもたちを想定し

ながら行う。

前期はまず「えがく領域」、「つくる領域」、「造形あそび」に分けて課題を設定し、内容はスライム作り、小石に絵を描く、紙コップや紙皿を使って工作をする、丸・三角・四角のかたちを使って遊ぶなどである。

後期の内容は粘土で妖怪、花畑を作る課題、割りばしで建物、遊具などの立体物を作る課題を行った後、「保育発表会」のために各クラスずつグループに分かれて大道具、小道具、衣装を制作する。最後は各自制作可能な適当なサイズの空き箱を用意し、迷路を制作する。

1年生で行うモダンテクニックや2年生で行う工作など制作工程がある内容については、あらかじめ内容や手順が載っている教科書や資料を配布して説明を行うが、全工程が終わった後に自らが行った制作手順(何をを用意し、どう行うか)、制作する上での注意点をスケッチブックに文章でまとめる。準備するものや制作手順は一度行っただけでは覚えられないことが多く、制作する際の注意点や教科書・資料には載っていない些細な発見は経験したその時に書き残すべきである。

その他にも、粘土は体質により手が痒くなったり赤くなったりするなどアレルギー反応が出る可能性や、学生が自ら想定することが難しい事項はこちらから提示し注意項目に足す。また、工作による立体制作ではハサミやカッター、ホチキス、キリなどの道具や糊、テープなどの多くの材料や素材を使用するため、正しい使い方や危険性を意識して確認する時間も設ける。

### 3 分析方法

#### (1) 調査対象・方法

授業からの学びをどのように得ているか分析するため、執筆者の一人が担当する授業を受講する短期大学1、2年生(通信課程の学生含む)を対象とした。1年生203名、2年生141名であった。

調査方法として、質問紙調査およびインタビュー調査を行った。質問紙調査は2016年7月から

9月にて、「造形表現Ⅰ」、「造形表現Ⅱ」、「こどもと造形表現Ⅱ」の授業中に質問紙を配布し即日回収した。回収率は99.2%であった。

インタビュー調査は2016年11月から12月に実施した。1年生40名（男性11名、女性29名）、2年生21名（男性8名、女性12名）を対象に質問紙の結果をふまえて半構造化面接法にて実施した。

## (2) 調査内容

質問紙の質問項目は、学年や性別など基本的な属性を回答するフェイスシートと授業に対する学生の評価を回答する項目である。質問項目は、執筆者が採用している教授法の効果測定に資する項目を先行研究を参考にして作成した。

以下では、本論文での分析に必要であり使用した項目のみ掲載する。「絵を描くのは楽しい。」、「絵本や絵がある本を読むのが好き。」、「工作をするのは楽しい。」、「授業以外の時間に絵を描いたり、工作をしたりすることがある。」、「説明や気持ちなど何かを伝えるときに、イラストや絵を添えることが好き。」、「説明を聞くときは文字や言葉よりも、絵やイラストのほうが理解しやすい。」、「

「絵具、クレヨン、粘土を使用することにより手が汚れることに抵抗がある。」、「自分が描いた絵や工作など作品を他人に見られるのは恥ずかしいと感じる。」の8つの項目を本論文では使用した。これら8つの項目の入学前後について4件法を用いて回答を求めた。

なお、質問紙の分析にはSPSS Statistics v.24を用いた。

## (3) 倫理的配慮

小田原短期大学研究倫理委員会による倫理審査と承認を得た。また、調査対象者には調査時において回答は自由意志で行うこと、匿名性が担保されていること、回収したデータは学術的な目的でのみ利用することなどを説明し同意を得た。

## 4 結果と考察

### (1) 質問紙の分析結果

入学前後の造形表現に対する学生の評価を比べるために、ウィルコクソンの符号付き順位検定を用い前後の差を分析した。学年別の結果は表1、2の通りである。

表1 1年生の分析結果

質問項目	負の順位	正の順位
絵を描くのは楽しい (N=192, Z=-3.96) ***	49	17
絵本や絵がある本を読むのが好き (N=193, Z=-2.12) *	26	12
工作をするのは楽しい (N=195, Z=-4.64) ***	45	9
授業以外の時間に絵を描いたり、工作をしたりすることがある (N=193, Z=-2.12) *	33	17
説明や気持ちなど何かを伝えるときに、イラストや絵を添えることが好き (N=194, Z=-4.71) ***	45	7
説明を聞くときは文字や言葉よりも、絵やイラストのほうが理解しやすい (N=194, Z=-1.73)	24	14
絵具、クレヨン、粘土を使用することにより手が汚れることに抵抗がある (N=194, Z=-1.04)	16	26
自分の描いた絵や工作などの作品を他人に見られるのは恥ずかしいと感じる (N=193, Z=-2.24) ***	12	30

\* $p<.05$  \*\*\* $p<.001$

表2 2年生の分析結果

質問項目	負の順位	正の順位
絵を描くのは楽しい (N=158, Z=-3.12) *	38	17
絵本や絵がある本を読むのが好き (N=156, Z=-2.64) *	23	8
工作をするのは楽しい (N=155, Z=-3.29) *	28	9
授業以外の時間に絵を描いたり、工作をしたりすることがある (N=157, Z=-2.22) *	31	19
説明や気持ちなど何かを伝えるときに、イラストや絵を添えることが好き (N=157, Z=-4.05) ***	35	7
説明を聞くときは文字や言葉よりも、絵やイラストのほうが理解しやすい (N=156, Z=-0.97)	17	12
絵具、クレヨン、粘土を使用することにより手が汚れることに抵抗がある (N=157, Z=-2.38) *	5	20
自分の描いた絵や工作などの作品を他人に見られるのは恥ずかしいと感じる (N=157, Z=-1.02)	14	23

\* $p<.05$  \*\*\* $p<.001$

## (2) 「絵を描くのは楽しい」、「工作をするのは楽しい」

1、2年生いずれも、入学前後を比べると負の方向へ変化していた。入学前は、自分のやり方で自分が思うものを描ければよい、保育では子どもが相手だから高度な作品を作る技術は求められないという意識であった。しかし、入学後に造形表現に関する専門的な授業を受けることで、絵を描く、工作をするという行為を専門的な観点から見直すことで、保育の場で絵を描いたり工作したりすることは気楽な行為ではなく、保育者としての専門的な職業行為の一部であると認識できるようになったことを表しているのではないだろうか。

この点について、インタビュー調査は以下の通りであった。

「絵を描くことは入学後も変わらず好きだが、ものを作ることがやりづらくなった。子どもの気持ちになって考えることが増え、自分が難しいと感じる部分はどうやって教えたらいいか、この制作は飽きないだろうかなどを考えると単純に楽しめない。」

「工作をする方が楽しい。高校の時の美術は使えるものを作ることが多く、自分のため、自分の好みにかわいくなど考えていたが、入学後は楽しむというよりは保育のため、自分で教えるために作り方や教え方をどうしたら良いか考えるようになった。」

「入学前より絵を描くことも工作することも両方大変だと感じることもある。入学後は自分が教えるために構造を理解し、もっと良い作品にするために考える。自分が教える立場になるという意識が強くなった。自分が楽しむというより子どもが楽しめるように制作を最後までしっかりやらなければと考えると大変に思うときもある。」

「絵も工作も楽しいと思っているが、子どもたちのことを考えると自分の好きだけでは出来ない

と感じる。今まで絵を描く時は好きなものを行き当たりばったりで描いていたが、入学後は特に壁面制作などの大きな作品はあらかじめ考えた案を下描きして先の作業を見通しながら行うなど、保育を意識して頭を使うことが増えた。子どもたちに見せるために、目に留まりやすいような色あいや形を下描きして、確認しながら進めていく。」

これらのインタビューからも、入学前の絵や制作に対する楽観的な視点から、専門的な授業を受けることで専門職としての視点を意識し始めていることがわかる。自分が楽しいかどうかよりも子どもたちのことを考え、教え方に意識を向ける学生や、造形が苦手な子に対してどう接するかを考えていることがわかる。

## (3) 「授業以外の時間に絵を描いたり、工作をしたりすることがある」、「説明や気持ちなど何かを伝えるときに、イラストや絵を添えることが好き」

入学前後を比べると、(2)と同様に負の方向に変化していた。とくに意識することなく絵を描いたり、ものを作っていた入学前と比べると、入学後に造形表現の授業を受けることで、描く、作るという行為全般に対して厳しい目を向けたり、子どもを意識することができるようになりつらると推察される。

これらを裏付けるインタビューデータは以下のとおりである。

「絵が得意ではないので絵で何かを伝えるのは好きではないが、子どもに伝えるためにうまく描きたいと思う。」

「入学前はリアルな絵が好きだったが、入学後にそれは子どもが喜ばないと思い、子ども向けの描き方や色合いを考え、アニメのキャラも描くようになった。目線が子ども重視になり、子どもがわかるように、喜ぶようにと考えて練習するようになった。」

「入学後は工作をすることはある。特に折り紙は季節ごとに合ったもので、今までの保育士や家庭では作らないような変わったものを教えるために調べて練習する。」

「授業以外で絵を描いたり工作したりすることはないが、特に絵は練習しなければならないと感じている。」

「授業外で絵を描くことが増えた。子どもの前で描くことを考えると、クオリティは気になり、学生のうちに練習しておきたい。卒業までに自分用のお道具箱を作り、いろいろな種類のペンや色を揃えたい。」

「子どもに対しては言葉よりも絵で伝えるのが良いと思うので簡単にわかりやすく描けるように練習している。」

「子どもに教えるという立場を意識すると、言葉だけではなく絵をつけ足すことも増えた。」

インタビューから、入学前の描画方法や意識では保育者の専門的な行為としては十分ではないという意識をもつようになっていくことがわかる。とくに、子どもに説明するときは言葉よりイラストや絵を添えた方がよいと考えるようになった学生が多く、そのために練習をしてうまくになりたいという前向きな意見もだされていた。

#### (4)「絵具、クレヨン、粘土を使用することにより手が汚れることに抵抗がある」

1年生は統計的に有意ではなかったが、2年生では正の方向へ変化していた。2年生の幼児教育の造形表現において触覚に働きかける活動として、主にフィンガーペインティングや粘土、様々な種類の素材に触れさせるなどがある。授業で新しい素材を使用する際はその素材と触れ合うことを大切に時間を多く確保した。どのような感触か、どのような気持ちになるかを意識的に経験し、確認

した上で作品制作を行う。こうした授業を通じて、2年生の意識が変化したのではないだろうか。

インタビューは以下の通りである。

「入学前は手が汚れることも準備することも面倒だったが、入学後は手が汚れることは気にしてられない。保育の現場で子どもが危険な時は汚れることを気にせず助けなければならない。片付けについては、道具を出したら片づけるというのが一つの流れになり、それも含めて教えなければならないので気にならなくなった。」

「造形表現を行うときは汚れるものだと思うようになったので抵抗はなくなった。」

「入学当時は粘土や絵の具で手が汚れることにとても抵抗があったが、今は抵抗がなくなった。」

インタビューから入学当初は手が汚れることに抵抗があった学生も、造形表現の授業を経験するうちに、改めて触感の楽しさを知り、子どもたちの援助・指導をすることを考えるようになったため意識が変わったと思われる。

#### (5)「自分の描いた絵や工作などの作品を他人に見られるのは恥ずかしいと感じる」

1年生では正の方向への変化に統計的な有意差を認めることができたが、2年生では有意差がなかった。

また、インタビューは以下の通りであった。

「入学当初は少し恥ずかしいと思っていたが、自分の作品が上手い下手というより、その課題を子どもが楽しんで行うことが出来るかということを考えるので、恥ずかしいと思わなくなった。授業で鑑賞の時間があるが、人の作品を見て子どもだったらどう思うだろうと想像し、自分にないアイデアを見ることが出来るので良いと感じる。」

「入学前はとても恥ずかしいと思っていたが、

授業の回数をこなすうちに少しずつ作品に自信が持てるようになり、前ほどは気にならなくなった。」

「自分の作品も人の作品もうまい下手ではなく、良さや面白さを発見するように見ることが出来るようになったので見られることには慣れた。」

「人に見られるのは苦手だったが、克服した。授業で毎回鑑賞する時間があつたので慣れたのもあるかもしれない。人の作品を見るのは楽しい。」

1年生から授業中に制作した作品を鑑賞し合う時間を設けており、スケッチブックにそれぞれの作品に対してのコメントを保育者の目線でまとめている。グループ制作の場合は1グループずつ作品を見せながら説明をし、それを聴いている学生は作品に対するコメントをまとめたり、質問をしたりする。保育現場では子どもたちの作品に反応しなければならず、内容がわからない作品や好みではない作品に対しても積極的に声をかけてコミュニケーションを取ったり、コメントをつけたりしなければならない。そのためにも学生のうちから人の作品に敏感になり、作品の中でひとつでも良いところを発見し言葉にする習慣をつけたいというねらいがある。

分析の結果から次のことがわかる。自分の作品に自信がないという学生が多く、小・中・高等学校で経験してきた図工や美術の影響か、評価する先生の好みやうまい下手で点数をつけられることへの不安感が感じ取れる。保育者養成校で学ぶ造形表現は今までの美術とは別物として、新たな気持ちで臨んでほしいと伝えているが、入学当初は鑑賞の時間に抵抗のある学生が多く見られた。

しかし、他者の作品にコメントをつけるために時間をかけて鑑賞することで、ただ見ているだけでは気づかない何かを発見することもある。それは自分の新しい発想の手助けにもなり、次の作品を楽しんで制作するきっかけになる可能性があるため、鑑賞は大切な時間として捉えている。それ

らを継続して取り入れていることが意識の変化につながったと考えられる。

#### (6) 「絵本や絵がある本を読むのが好き」

分析結果から、入学前より後のほうが、絵本や絵がある本を読むのが好きではない学生が増えていた。

しかし、インタビューとあわせてみると、単に絵本が好きではなくなったという理由ではないと考えられる。

「入学後は子どもたちのことを考えて、本屋さんや図書館の絵本コーナーを注意して見るようになった。」

「絵が好きな絵本に興味がある。形や色あいのセンスなど絵本作家さんに対する見る目が、入学後に子どもたちのことを考えると厳しくなった。簡単には選べない。」

「入学前より入学後の方が絵本のことを考えるのが好きではない。何を伝えたいか考え、その内容に沿って絵本を選ぶので、好きだけでは選べない。」

「絵本は好きだが考えることがたくさん増えた。年齢に合わせて文字の大きさ、文章の多さ、絵がかわいいかどうか、読みやすいかどうかなど。」

「入学後は教育のことを考えると好きだけでは選べないし、実習の時は一度に何冊もの絵本を読まなければならないので面倒だと感じることもある。」

「入学前までは自分の好きな絵本を選んでしたが、入学して子どものことを考えると、自分が好きな絵本は子どもが喜ぶ楽しい絵本とは限らないと感じた。子どもに必要なだと思える内容や楽しめるものを選びたいので、考えることが増えた。」

「今はただ自分が好きなものを選ぶことはない。絵本選び、特に読み聞かせをするために選ぶときは色や絵、内容に注意し、何歳に適しているかを常に考えている。」

これらのように、自分のことよりも子どものことを考えて答える学生が多く見られた。絵本については造形表現の授業の他に独立した授業があるため本授業では直接的には扱っていない。

しかし、造形表現の授業で自分が描く絵や他の学生が描く絵を見る機会が増え、絵本の絵に対しての表現方法や色合いなどにも厳しい目や保育者としての専門性を意識したまなざしをもって見るようになってきていることがわかる。単に好きだから読む、絵本が好きだという水準から、保育者としての専門的な視点でそれらをとらえるようになってきていることが、質問紙調査の回答にも影響したと思われる。

## 5 まとめと今後の課題

本論文では、造形表現の授業を事例として、保育者を目指す学生が養成校で保育の専門的な知識・技術を学ぶ過程に着目し、どのように学びを得ているかについて明らかにすることを目的とした。

まず、質問紙調査の分析では、入学前後を比べると入学後に絵を描くことへの戸惑いや停滞が強くなるという結果であった。しかし、インタビュー調査によると、こうした戸惑いや停滞は授業に対する退屈感や嫌悪感からではなく、専門的な授業をうけることで、子どもを意識した活動や保育の方法を学び、保育の楽しさのみならず、難しさや奥深さを理解し始めていることの表れであった。本を読む、絵を描くなどの入学前はとくに意識していなかった日常的な行為が、保育の専門的な授業によって専門的な視点から自分の行為を振り返り、専門的な知識や技能を難しさや奥深さを理解することで専門的な行為へと変化していく過程が明らかとなった。

作品を見ると、完成した状態で成立しているかのように見えるかもしれないが、その作品が出来あがる制作工程には多くの経験と発見、選択と決断などが折り重なり、一枚の絵やひとつの工作にはそれだけの時間が流れている。子どもたちの作品を見た時に、その作品に流れる時間を感じ取ることが出来る保育者がどれだけいるだろうか。

造形表現に関わる保育者は美術を好きでも嫌いでも、得意でも不得意でも子どもの作品に興味を持って接していかなければならない。保育者にとって子どもの作品とのかかわりが辛い時間になったり、自分だけの偏った考えによる言葉かけになったりしないよう、保育者になる学生自身の感性を養うために多くの経験と作品を見る力を身につけなければならない。

日常生活の中で意識しなければ見えないものはたくさんあり、面白いアイデアは見えていない日常にあることに気づいていない保育者は多いのではないだろうか。テクニックや知識、危険性への注意以外に学生が学ぶ造形表現で必要なことは、日常生活を意識してよく見る力や見方を変える力であり、何気ない日常を面白くする力を養うことである。ただ受け身で制作をする時間にするのではなく、自らがその場でその時に感じられる感動や驚き、発見、新たな発想など、何かが生まれる時間や空間であってほしい。

保育者を目指す学生にとって美術が得意な人が教える素晴らしい造形表現ではなく、誰でもどんな状況でも教えられる楽しく面白い造形表現を目指して、子どもたちに提供する力を身に付ける方法について検討することを今後の課題としたい。

## 引用参考文献

- 阿部宏行 (2017) 「なぜプロセスが重要なのか? : 造形活動と資質・能力の発揮」『北海道教育大学紀要』67(2), 193-202.
- 木谷安憲 (2015) 「保育者を養成するためのワークショップ的題材開発の研究—保育内容(表現・造形)の授業を通して—」『川口短大学



紀要』29, 159-171.

厚生労働省（2008）『保育所保育指針』.

小林曜子（2016）「絵の具での遊びにおける幼児と学生の感性に関する一考察—感性豊かな保育者を育成するために—」『富山国際大学子ども育成学部紀要』7, 71-90.

佐善圭（2011）「保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅱ—シルバーリング制作を導入した造形指導の実践的研究—」『岡崎女子短期大学研究紀要』44, 23-34.

佐善圭（2012）「保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅲ—シルクスクリーン版画制作を導入した造形指導の実践的研究—」『岡崎女子短期大学研究紀要』45, 40-52.

佐藤学（監修）、ワタリウム美術館（編集）（2013）『驚くべき学びの世界—レッジョ・エミリアの幼児教育』.

高橋敏之（2002）「造形表現におけるイメージの形成とその母胎—図画工作・美術科教育の今日的課題と方法論序説—」『大学美術教育学会誌』34, 247-254.

武田まち子（1999）「保育者養成校の『美術』が好きになる造形教育の方法（その一）：美術の嗜好や興味についてのアンケート分析を通して」『東九州短期大学』8, 77-84.

日名子孝三ほか（2015）「保育現場に於ける造形指導の問題点と授業に於ける学生の表現について」『文京学院大学人間学部研究紀要』16, 49-61.

槇英子（2008）『保育をひらく 造形表現』萌文書林.

村田夕紀（2010）「幼児造形指導の試み—豊かな表現を引き出すために—」『四天王寺大学紀要』50, 229-236.

文部科学省（2008）『幼稚園教育要領』.

浅井拓久也（埼玉東萌短期大学専任講師）

道源綾香（小田原短期大学特任助教）